

# 火山に夢を見る

## ——グスコーブドリとカヴァリエーレの詩学

挽地康彦

### 1. ラハイナの悲劇

水、火、大地、大気——自然の四大元素であり、災厄ともなる四つのかたち。なかでも、火の餌食となったものは消失し、大気が変わる。

2023年8月8日に起こった悲劇のひとつに、マウイ島ラハイナ (Lahaina) の大火災がある。かつてハワイ王国の首都であったラハイナは、世界有数の捕鯨船の寄港地としても栄えた街である。歴史的な建造物や史跡が遍在し、メルヴィルの『白鯨』で描かれた古都には、世界中から観光客が訪れていた。その、島の西海岸に佇む小さな街が、瞬く間に炎に包まれ、灰と瓦礫と墓場と化した。あのラハイナが、一夜にして焼失したのだ。

もともとハワイの島々は海底から噴出した溶岩から誕生した火山島であるが、マウイ島のハレアカラ火山はラハイナの彼方にあり、眠っていたはずである。ラハイナを消滅させた「火」は何だったのか、

ハレアカラの噴火でなければ。

現地では火災直後から毎日のように被害状況が報道されたようだが、当初「山火事」と報道した日本のニュースサイトは、次第にラハイナ火災から離れていった。ハワイから遠く離れて暮らす私には、地元ハワイの新聞社のウェブサイトか、もしくはホノルル在住の知人が公開する情報＊に頼るしかなかった。あれから三か月ほど経過した現在でも、Googleマップは更新されていない。ストリートビューには、いまなおラハイナの美しい街並みが広がっており、焦げ付く前の車列を横目にフロント・ストリートを疑似散歩できる。PCのスクリーン越しに見る風景には違和感よりも、まだ既視感や安心感が支配している。この先、Googleマップは変わり果てたラハイナの街を映し出すのだろうか。

驚いたことに、ハワイ州知事をしてハワイ史上最悪の災害と言わしめたラハイナ大火災は、どうも人的被害の大きさだけが「最悪」を意味する訳ではないことがその後の情報でわかってきた。人口わずか1・3万人の小さな街での搜索範囲が90%以上に及んでも、住民の10人に1人が命を失ったことが判明するまでに数週間を要し、行方不明者の数は一向に減らなかつた。人口比でみた犠牲者数の割合の高さに衝撃を覚えつつも、被害状況を示す数字は依然として流動的であつた。しかも、目の前の惨状を客観的に把握することすらままならない状態のなかで、大火災の原因究明と責任追及の渦がハワイ社会のカオスの展開に拍車をかけていった。ある意味では「ハワイらしい」とも解釈できる惨劇の第二幕が、火災後から始まつたのである。

ラハイナを襲つた炎は、自然のものか、人為のものか。ハワイの有力紙『ホノルル・スター・アドバタイザー』紙（8月11日付）によれば、ラハイナの街に火が広がる前に、強風によつて断線した電線があるとの通報が住民から寄せられていたという。原因究明が進むなかで明らかにされたこの情報は、次のような言説を強力に後押しすることとなつた。断線した電線から発火し、そこから散つた火花が枯草に燃え移つたことが、今回の火災の原因になつたのではないかと。

当時、ハワイ諸島の南洋ではハリケーンが通過しており、国立気象局は「風と火災が被害を与える恐れがある」との警告を事前に出していた。実際に、ラハイナの街を瞬時のうちに火の海にした要因には、ハリケーンの影響で発生した強風が山から海に向かって吹き降りていたことも疑いのない事実としてあった。電線を管理するハワイアン・エレクトリック社（ハワイ電力）は、送電を一時的でも遮断すべきであったとして、火災発生のリスク管理を怠った過失責任を問われている。火災の被害者らによってハワイ電力を相手取った集団訴訟が始まり、それに加えてハワイ州マウイ郡も告訴し、ハワイ電力会社の株価は暴落した。

とはいえ、批判の矛先はハワイ電力のみならず、ハワイ電力を訴えたマウイ郡の危機管理体制にも向けられていたことは、日本でも報道されたとおりである。山火事等の発生を防ぐための枯草除去が疎かになっていただけでなく、街中に火災が拡大してもなお、ラハイナでは防災警報のサイレンを聞くことはなかった。マウイ郡の緊急事態管理長官をはじめ、ハワイ州知事も防災警報サイレンを鳴らさなかったのは「そのサイレンは津波警報のためのサイレンだった」という。この苦しい弁明には言葉もない。さらに、災厄は火のかたちのみならず、大地と水の領域をも飲み込んでいく。英紙『ガーディアン』（8月17日付）のウェブサイト<sup>＊1</sup>に寄稿したナオミ・クラインとカプアアラ・スプロットによる記事によると、惨事に見舞われたマウイ島の被災住民らの土地と水が「ショック・ドクトリン」による災害資本主義の標的になっているというのだ。

土地をめぐるでは、不動産業者や開発業者が「火災ですべてを失ったラハイナの住民に電話をかけて、公的補償を待つよりも先祖代々の土地を売るよう勧めてくる」との苦情が後を絶たない。また、破滅的な火災の原因究明のなかでは、消火用の水不足の問題も指摘されていた。19世紀のプランテーション経済から続く「セトラー・コロニアリズム（入植者植民地主義）」による水資源の搾取構造から、「自分たちの水を自分たちで管理する」権利を求めて活動してきたネイティブ・ハワイアンのコミュニティ組織が、

消火活動に必要な水の供給を遅らせたとの批判を受け、ウェスト・マウイ・ランド社などマウイの不動産開発業者によって再び水の利権が奪われようとしているのだ（クラインらは、それを「プランテーション災害資本主義」と呼んでいる）。

ラハイナの街を消滅させた火の災厄に優るとも劣らない、プロメテウスの仮面をかぶった人間たちが繰り広げる終わりなき悲劇。「偉大な文明は、外部からではなく、内部から破壊され征服された」とは歴史家のウィル・デュラントの言葉だが、ラハイナを舞台にしたこの悲劇では、どこまでが内部で、どこからが外部だといえるのだろうか。

## 2. プロメテウスとしてのブドリ？

マウイ島には、半神マウイが人間のために太陽を捕まえて昼間の時間を長くしたり、休眠中のハレアカラで火を熾していたアラエ鳥の秘密を暴いてハワイの人びとに火を授けたりする神話や伝説がある。人類学者J・G・フレイザーは『火の起原の神話』（1930年）において、ポリネシアの伝説や民話の中に古代ギリシャのプロメテウスの神話を読み込んでいた。火を持たない人間の不幸、人間による火の発見、火を盗みとった官能。半神マウイによる火の恩恵にも半神プロメテウスによる火の贈与が見出せるとするなら、今となつては皮肉なことである。

古代ギリシャ神話において、ゼウス以前の巨人神族であるプロメテウスは人間に好意的だったことで知られる。一説には泥土に息を吹き込み、人間を造ったという。それを不満に思つたゼウスは人間を苦しめるために火を隠した。そこでプロメテウスは神々の世界から火を盗み出し、人間に与えた。そしてプロメテウスはその咎を負つて告発され、神々によつて責めを受ける。

ガストン・バシユールは、「詩的なプロメテウスは、われわれを人間的なものの美学に誘う」（『火の詩学』p. 166）と語っている。彼によれば、文学者、哲学者、思想家、詩人、夢想家たちはこれまで、

古代ギリシャ神話のプロメテウスの表徴のもとにまとめられた種々の伝説の断片から、その詩的な意味をめぐって探求してきたという。ヘシオドスやアイスキュロスといった紀元前の詩人をはじめ、プラトンからニーチェ、そしてゲーテに、ユング、バシュラール、近年ではスティグレルまでもが、神でありながら人間以上に人間的なプロメテウスという象徴的価値に抗うかのように、複数の詩的イメージを散乱させてきたのである。

宮沢賢治の「グスコープドリの伝記」(以下、「伝記」)もまた、プロメテウスをめぐる古代ギリシャ神話を想わせる童話の一つとして数えられよう。この「伝記」のなかで、グスコーナドリの息子ブドリは、プロメテウスがごとく「火」を獲得し、自己犠牲を払って苦難に覆われたイーハトーブを救おうとする。もちろん、ブドリの伝記の中に自己犠牲の精神をみるのはひとつの解釈に過ぎず、その詩的なイメージはもつと豊饒な世界に開かれていくはずである。

「伝記」のあらすじを追うと、イーハトーブの森はしばしば冷害による飢饉に見舞われていた。食べ物も底をつき、樵<sup>きり</sup>の父が森に消え、続いて母も追うように姿を消す。妹のネリと二人だけになった幼いブドリのもとに、森を買収して「てぐす」(蚕)の産地に変えた資本家の男がやってくる。「てぐす工場」を経営するその男はネリを連れ去り、貧しいブドリは子どもながらに工場で働くことになる。しかし、てぐす飼<sup>い</sup>い(養蚕)に慣れてきたところに、火山噴火が起き、イーハトーブのてぐすは降灰被害によって全滅し、工場も閉鎖されてしまう。

路頭に迷ったブドリのもとに、今度は冷害や干ばつに翻弄される赤ひげの「オリザ」(稲)の山師が現れ、ブドリはその山師による投機的な作付けを手伝いながら、農業について学んでいく。オリザはたびたび病気にかかり、ある百姓は石油を流して病気を殺そうとする始末。収穫が上がない年が続くと、肥料も買えないブドリの主人はいよいよ馬を売り、田んぼを売り、ブドリに暇を出した――。

この伝記の前段では、自然災害に起因する数多の苦難(降灰、冷害、干ばつ、飢饉)と産業化の足音が

重苦しい雰囲気とともに聞こえてくる。いわば、近代初期の日本版「マルサスの罠」とでも呼びうるような懸念が、賢治の世界に影を落としているのだ。周知のとおり、「マルサスの罠」とは古典派経済学者のマルサスが『人口論』（1798年）のなかで唱えた人類の悲惨な宿命のことを指している。初期のマルサスの人口原理にしたがえば、人口は幾何級数的に増加するが食糧は算術級数的にしか増加しないため、人口過剰が貧困増大の要因となる。よって人びとが窮乏化から逃れるためには、自然の摂理（貧困と悪徳）に便乗しながら人口を抑制するのが得策だ、とマルサスは説いたのである。

社会の「非生産的人口」（貧者）を社会改良によって救済すべきでないという立場をとるマルサスにはどこか、洪水を起こして人間を滅ぼそうと計画した主神ゼウスの分身が宿っているようにもみえる。歴史的に言えば、マルサスの罠は、20世紀になると食料生産における技術革新によって劇的に克服されていくのだが、21世紀に至ってもなお、南の世界には北の人間の欲望によってその罠に囚われたままの側面があることも忘れてはならない。

ここで『プロタゴラス』に記された、プラトンの示唆に富む一説を引いておこう。

「そこでプロメテウスは、人間のためにどのような保全の手段を見出してやったものか困りぬいたあげく、ヘパイストスとアテナのところから、技術的な知恵を火とともに盗み出して——というのは、火がなければ、誰も技術知を獲得したり有効に使用したりできないからである——そのうえでこれを人間に贈った。

こうして、生活のための知恵のほうは、これによって人間の手にはいったわけであるが、国家社会をなすための知恵はもたないままだった。それはゼウスのところにあったからである。」

(pp. 43 - 44)

「グスコープドリの伝記」は、まさにゼウスに不服従を示したプロメテウスがごとく、ブドリ自身がマルサスの罠を回避しようとする物語だとみてもよい。だが、ここでは社会改良をめざす救世主としての国家や社会が文脈化されていないことも踏まえておくべきだろう。後段で迎えるクライマックス、つまり「カルボナード島の人工噴火計画」は、この童話を有名にした最も重要な場面であり、まさにブドリの姿にプロメテウスのイメージを重ねてしまうシーンである。

クーボー大博士のもとで学んだ後、イーハトーブ火山局で立派な技師となったブドリは、イーハトーブを襲う冷害を食い止めるために、人工降雨による施肥だけでなく、気候温暖化を狙った火山の人工的な噴火計画を発案する。しかし、人工噴火を実行するには火山と供にあることが求められる。火山局に勤める同僚の老技師ペンネンが最初に犠牲になることを志願するも、失敗した場合に次の手を打てる者が生きるべきだとブドリに説得され、ブドリが自分の命と引き換えに火山へ去っていくところでこの伝記は閉じられる。

神的自然から火を盗んだプロメテウスは、火を知的に制御する技術の創造神であった。ただし、火の恩恵を「死すべき者ども」人間に授けるには、告発と責苦の犠牲をとまなっている。他方、「グスコープドリの伝記」には、イーハトーブの救済を決断したブドリを責め立てる神々はいない。つまり、この点でもゼウスは不在なのである。ここに賢治の「伝記」が自己犠牲の物語として読まれる所以があるのだが、ゼウスの不在は同時に、テクストの中のブドリの美学的形象をプロメテウスの神話から、ヘルダーリンの未完の戯曲『エンペドクレスの死』へと移し替えていくことを可能にする。

何よりも関心を引くのは、ブドリが依拠し、そして制御しようとした火の技術が、太陽の熱でも、落雷の光でもなく、火山の噴火に向かったことだ。カルボナード島火山でのブドリの犠牲とシチリア島エトナ山でのエンペドクレスの死。その二つの英雄的行為が織り重なる詩的な意味は、火に身を捧げることは自身が火になること、すなわち「ブドリ（＝人間）」が「自然（＝神々）」と和解することにある。



ブドリがエンペドクレスたる所以は、火山に身を投じる行為が、自己犠牲というよりはむしろ「破壊」、ないし炎の無化というべき生の在り方を示しているからである。

### 3. バシユラルのカヴァリエール

「火」という元素が有する内密的で、躍動的で、超越的な生命のエネルギー。ゆえに人類は炎を前にして夢想し、詩的な想像力をかきたてられてきた。こうした地平を精神分析や現象学の観点から考察してきたバシユラルは、自著『火の精神分析』（1938年）のなかで、物質としての「火」を存在としての「人間」の全体的な比喻として捉えていた。いや、バシユラルの思考により忠実になれば、「火」は人間存在の精神的な象徴であるだけでなく、その内奥には「生成」あるいは「再生」、「想像力」ないしは「夢見る力」があること。彼はそれを自身の存在論から示そうとしていたのだ。

「火」の具体例として蠟燭に着目した『蠟燭の焰』（1961年）では、垂直に燃え上がる蠟燭の炎と、その炎を夢想する人間の心的現象 (Oxydisme) の関係が取り上げられている。上に向かって垂直にほとばしる炎は、人間の燃え上がる情熱であり、高みを目指す精神であり、不死鳥フェニックスのように解放され再生されるべき生の輝きなのである。

バシユラルによる「火」をめぐる思考のプロセスを辿っていると、その分析対象が、まるでスーザン・ソントグが手掛けた風変わりな小説『火山に恋して』をテキストにしているかのように思えてくる。そうであれば、バシユラルが火という元素に託した希望を、『火山に恋して』の主人公「カヴァリエール」の人生に読み込むことはできないだろうか。もちろん、実際には、ソントグがバシユラルのテキストを読み込んだのだろうか。

ソントグのテキストのなかで、語り手はつぎのように述べる。



「ひとは大火を愛してやまないが、最大の快感は火山の破壊力ではなくて、すべての無機物を縛る重力の法則をそれがはねつけてしまうことかもしれない。植物の世界を眼にして第一に快いのは、それが上に垂直に伸びることである。われわれが樹木を愛するのはそのためだ。ひよつとしたら、われわれが火山にひかれるのは、バレエのようにそれが舞うからだろうか。溶けた岩がどこまで舞い上がるのか、キノコ状の雲よりもどこまでも高く。スリルは山がみずからを噴き上げるところにある、たとえそのあとで、ダンサーのように、地表に戻らざるを得ないにしても。ただ降りるのではなく、――降る、われわれの上に降るのだとしても。しかし、まず上がるのだ、飛ぶのだ。すべてのものが引き止め、引きずりおろそうとするのに。下へ。」

（『火山に恋して』 p. 35）

ソングによる壮大な長編小説『火山に恋して』は、18世紀半ばから19世紀にかけて英国公使としてナポリに赴任したカヴァリエーレことウィリアム・ハミルトン卿（Sir William Hamilton 1730 - 1803）とその妻エマ・ハミルトン、イギリス海軍提督ホレイショ・ネルソンをめぐる物語である。作中では、フランス革命やナポレオン戦争の影響を受けるイギリス海軍、ナポリ共和国といった歴史を背景に、当時実在した人物たちが登場するが、この小説は近代初頭の激動を描いた単なる歴史小説ではないし、英雄叙事詩でもない。また、愛人関係にあったエマとネルソンを交えた危険な三角関係が注目されがちだが、ロマンスを題材にした愛憎物語かといえそうでもない。全編を通して描出話法で綴られるように、一人称のカヴァリエーレが語ったかと思えば、三人称の語り手による複合的なカヴァリエーレ像が紡ぎだされ、冒頭に出てくる蚤の市にまさに迷い込んでいくような、作品自体が雑多な骨董品Ⅱ数々の断片からなるコラーージュによって描かれている。

先に見た、火の様態と人間の生命との間の能動的な結びつき、あるいは上へと垂直に向かう炎の力動

性（ノヴァーリス）と躍動する人間の生との一体化との関連でいえば、やはりこの作品の魅力はヴェスヴィオ火山の研究にのめり込み、火山をこよなく愛したカヴァリエーレという一個の人間の内なる生にあるのだろう。美術愛好家、蒐集家でもあったカヴァリエーレは、ナポリに赴任して以来、火山に心酔した。情熱の赴くままに噴火口に足を運び、火山のすべてを観察し、記録し、市場価値のない溶岩を熱心に蒐集していく。

火山の噴火は、カタストロフと災厄の予兆であり、革命と動乱のメタファーである。と同時に、約12分間隔で白い息を吐く「手負いの怪物」（『活火山』）は「間歇的に生命のきざしをみせる」人間のメタファーでもある。

「火山の口。確かに、口だ、そして溶岩は舌。一個の体だ、男でもあり女でもある怪物的な体。吐き出し、放出する。それは内臓であり、深い底でもある。生きていて、だから死ぬこともある。動かぬと思うと、時に応じて身震いする。」（前掲書、p. 6）

「火山に恋して」（The Volcano Lover）というタイトルは、まずもって火山がカヴァリエーレにとつての怪物であり、最愛の恋人であることを意味する。そして溶岩の蒐集は、彼にとつて「無私の情熱」、「儲けのことなど考えない、純粹の蒐集」であり、その標本は彼の名譽のための、火山の名譽のための贈り物であるとされる。

品行と理知で知られたカヴァリエーレであったが、彼の時代と同じように、彼は言われているほど合理主義者ではなかった。カヴァリエーレは18世紀の啓蒙主義者であり、博物学や考古学の科学者であり、無神論者であったのだが、火山への魅惑に冥界趣味を偲ばせ、あらゆる迷信、魔術、不合理をさげすみながらも火山の噴火を予言した場末の巫女エフロシーナの隠れた顧客となっていた。

彼の蒐集にみられる飽満・過多は強い憂鬱症からくる過剰行動であつたものの、驚くような熱意の力によつて、つぎつぎにメランコリアの渦を渡つていった。しかしながら、燃焼する炎はいつしか燃え尽きて終わりを迎える。美術品と火山の蒐集に傾けた情熱が衰え始めると、カヴァリエーレの悦びも途切れていった。フランス革命とその後の戦争はカヴァリエーレを取り巻く状況を大きく揺るがし、彼らはナポリを後にすることになる。その途上、ロンドンに向けて送られた蒐集品の多くは輸送船コロッサ号と共に海に沈んでしまう。

「火の敵、水の餌食となるものは消尽することはないとしても、破損する。場合によつては、そのままの形で残るものの、沈み、押収されて、手が届かなくなる。」（前掲書、p. 254）

ただし、語り手はいう。

「カヴァリエーレの豪華な古代の壺のように古くからずっとあるものは、とりわけ幾世紀も生き延びてきたものは、不滅となる可能性がある。われわれがそうしたものに執着し、蒐集する理由のひとつは、いつの日にかそれがこの世から回収されてしまうということが未決であるということだ。」（前掲書、p. 288）

カヴァリエーレが生涯をかけて息を吹き込んだ蒐集品の数々。プロメテウスが人間を造形したように、カヴァリエーレによつて生命を与えられ、生成する雑多なモノからなる全体性。ここには、死と再生の瞬間を集約する「火」のイメージのなかに物質的な想像力を探求しようとしたバシュラルの試みが垣間見える。

#### 4. 火の想像力の弁証法

『火山に恋して』で表象される英国公使のカヴァリエーレ像には、やはりバシュラールが夢想するプロメテウス像が共鳴している。バシュラールは『火の精神分析』や『火の詩学』などの著作において独自の章を設けながら、プロメテウスが放つイメージの存在論的な意義について検討している。「火」を基点に人間の心象活動を考察するうえでプロメテウスという神のイメージは、彼のなかで重要な位置を占めていたのだ。

「火によって昂揚した世界。過剰な世界への参加。瞑想されるプロメテウスによってわれわれは活動の場に、それも制御された活動の場に置かれる。火を灯し、火を盛んにし、世界の諸力を増大させ、しかも抑制し、調整しようと努める人間。

詩的なプロメテウスのイマージュは、人間の本性をさらに高めてゆくような心象活動をいつも指示している。心象（プシシズム）の美学、つまり精神生活を強化し力動化する心象活動は、プロメテウスの表徴（シーニユ）のもとに置くことができるだろう。」（『火の詩学』p.106）

プロメテウスは人間の創造者であり、かつ火の贈与者である。そこには、粘土を捏ねて人間の形にし自らの息を吹き込んで生命を与えた創造者プロメテウスと、火を人間に与えるために天空から火を盗み取った英雄プロメテウスという二つの像が結合している。バシュラールは、そうしたプロメテウスのイメージに「創造される火」と「生きられる火」というイメージを詩的に重ねながら、統一的な一人の人格を描こうとしている。プロメテウスは、「すでに、生命あるものをかたちづくるときに、焔のもろもろ

の力をそこに吹き込んでいるのだ」(前掲書、p. 173)。

『火の詩学』という書物は、バシユラルの死後、娘のシュザンヌによつて編集され刊行されている。シュザンヌは本書の緒言で「生きられる火」と題した父の草稿を紹介しているが、ここでは、「アニムス(の火)」と「アニマ(の火)」という〈生の二つの極〉の弁証法に〈火の想像力の二つの極〉の弁証法が結びつく瞬間にこそ、「生きられる火」という人間の集合的無意識が見いだされるのだと指摘している。「人間が火となること」、ないし「火が人間の想像的経験のなかに内在化されるということ」は、アニムスとアニマの弁証法としても理解される。カヴァリエーレは、外交を担う英国公使であり、啓蒙主義者であり、科学者であつた一方で、無類の蒐集家であり、抑鬱気質の持ち主であり、神秘主義者でもあつた。ここにて、「知性、理性、権威、自信、主張」というアニムスと、「魂、情熱、怒り、空想、遊び」というアニマの間の矛盾を生きるカヴァリエーレが火山を愛してやまなかつたことは、われわれにたいして重要な詩的想像力を喚起させよう。

また、上記のような弁証法的発想は、父ガストン・バシユラルの火の研究に全面的ではないにせよ、幾ばくかの影響を与えた心理学者ユングの功績、共同的・心的祖型の議論からもたらされていることはよく知られている。とりわけ、ユングやバシユラルが弁証法の観点から焦点を当てたのは、兄プロメテウスと弟エピメテウスの一体化についてである。古代の叙事詩を通じた一般的な理解としては、狡智のプロメテウスと愚昧のエピメテウスという二重の形態、「プロ・メテウス」先見の明(前もって知っている者)と「エピ・メテウス」後知恵(事後にやつと学ぶ者)という互いの言語的関連である。

カール・シュピッテラーやゲーテの文学作品、そしてフレイザーの民族誌にも当てはまるのだが、この二人の神(登場人物)を二項対立のもとに表象する場合もあれば、神話学者のカール・ケレーニイ、ユング、バシユラルらのように、両者を対立的人物として見なすのではなく、ゲシュタルト、二者同一体、一対の神話的な双子として捉える思潮もある。「狡智と愚昧が互いに補い合つて、人間を特徴づけ

「と、狡智にたけたプロメテウスと愚かで鈍いエピメテウスの相補性を意識しながらバシユラルが述べるのは、ケレーニイの言葉を借りれば、「狡猾なプロメテウスも、ヘシオドスの物語が示しているように、ゼウスに対しては事後になつてやつと学ぶ者」だからである。ケレーニイは、プロメテウスの存在形態には「欠落性」が潜んでいるという。その欠落性はそもそも人間的なものの内に根づいているものであり、それゆえにプロメテウスは人間へと引き寄せられる。そのとき、エピメテウスはプロメテウスに成り代わって、この欠落性を示唆するのだ。

「逆生産性」という概念を用いて近代社会を批判した社会学者のイヴァン・イリイチは、自身が古代ギリシャから蘇らせた「コンヴィヴィアルな生」を追究するなかで、「エピメテウスの人間の再生」を説いた『脱学校の社会』。イリイチは、近代社会を操作できると信じるがあまりその奴隷と化した「工作人間」(homo faber)のエートスを「プロメテウスの誤謬」として退けようとする。このとき、彼が「誤謬」と呼ぶのは、工作人間が英雄プロメテウスを気取って自身の欠落性に向き合わないからである。エピメテウスの人間はなにも、プロメテウスの人間の対極にあるのではない。ただ、欠落を悟り、開示できるのがエピメテウスの人間だからであり、ゆえに炎のごとく魂の上昇を夢想できるからである。

### 《註》

\*1 彼は長年「楽園ハワイと私」というブログを運営しており、ハワイ社会の貴重な情報を発信し続けている。

\*2 Naomi Klein and Kapua'ala Sproat (Aug 17, 2023)

### 《文献》

アイスキュロス『縛られたプロメテウス』(呉茂一訳、岩波書店、1974年)

イヴァン・イリイチ『脱学校の社会』(東洋・小澤周二訳、東京創元社、1971・1977年)

Naomi Klein and Kapua'ala Sproat, 2023, *Why was there no water to fight the fire in Maui?*, The Guardian.

ゲーテ『ゲーテ全集4』（登張正實ほか編、潮出版社、1979年）

カール・ケレーニイ『プロメテウス——ギリシア人の解した人間存在』（辻村誠三訳、法政大学出版局、1959年）

1972年）

スーザン・ソントグ『火山に恋して——ロマンス』（富山太佳夫訳、みすず書房、1992年2001年）

ガストン・バシユラル『火の精神分析』（前田耕作訳、せりか書房、1938年1969年）

ガストン・バシユラル『蠟燭の焰』（洪沢孝輔訳、現代思潮新社、1961年1966年）

ガストン・バシユラル『火の詩字』（本間邦雄訳、せりか書房、1988年1990年）

プラトン『プロタゴラス——ソフィストたち』（藤沢令夫訳、岩波書店、1988年）

ジェイムズ・ジョージ・フレイザー『火の起原の神話』（青江舜二郎訳、筑摩書房、1930年2009年）

ヘシオドス『仕事と日』『神統記』『ヘシオドス全作品』（中務哲郎訳、京都大学学術出版会、2013年）

ヘルダーリン『悲劇エムペードクレス』（谷友幸訳、岩波書店、1953年）

マルサス『人口論』（永井義雄訳、中公文庫、1798年1973年）

宮沢賢治『グスコップドリの伝記』（羽田書店、1941年）

カール・グスタフ・ユング『タイプ論』（林道義訳、みすず書房、1967年1987年）

ひきち やすひこ：和光大学現代人間学部人間科学科教授